



タイトル Title	神戸GCPの成果に関する一考察 : 3人の参加学生のフォローアップ事例 をもとに(A Study on the Outcomes of Kobe Global Challenge Program : Based on Three Participants' Follow-Up Cases)
著者 Author(s)	友松, 史子 / 米谷, 淳
掲載誌・巻号・ページ Citation	大學教育研究,29:87-102
刊行日 Issue date	2021-03
資源タイプ Resource Type	Departmental Bulletin Paper / 紀要論文
版区分 Resource Version	publisher
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	10.24546/81012710
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/81012710

神戸 GCP の成果に関する一考察 —3 人の参加学生のフォローアップ事例をもとに—

A Study on the Outcomes of Kobe Global Challenge Program: Based on Three Participants' Follow-Up Cases

友松 史子 (北九州市立大学 国際教育交流センター 特任准教授)

米谷 淳 (神戸大学 大学教育推進機構 教授)

要旨

「神戸グローバルチャレンジプログラム」は、1・2 年次学生を対象に、2016 年度よりフィールドワーク、インターンシップ、ボランティア活動といった学外学修を展開しており、2019 年度末までの 4 年間にのべ約 470 名の学生が参加した。本稿はその面接調査の中から典型的な 3 名の学生のインタビューと彼らが事後学修で書いたフィードバックシートを検討して、神戸 GCP の参加者が 1・2 年次において主体性を重視した海外学修活動を経験することにより 4 年間の学士課程期間にどのような成長を遂げるかについてモデル化を試みた。その結果、3 名とも初年次における神戸 GCP の経験がきっかけとなって、その後、さらに神戸 GCP の別のコースに参加したり、学部の海外研修に参加したり、海外旅行でいくつもの国に訪れるなどして海外経験を積み重ね、深め、自らのキャリア形成につなげていること、自己効力感に駆動されて新たな課題に挑むことで自分をさらに成長させようとしていること、キャリアの道筋をつける力をより確固なものとしていくことが社会で役立つコンピテンシー獲得につながることを示唆された。

1. はじめに

本論文は、1・2 年次を対象にした学生の主体性を重視した海外プログラムへの参加が、それ以降の学生の学修を中心とする大学生活やキャリア形成にどのようなインパクトを与えるか考察する。近年、これに関連して「大学における海外体験学習への挑戦」(子島・藤原, 2017)、「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス—質的研究手法を使って—」(奥山, 2017)、「海外留学がキャリアと人生に与えるインパクト」(横田・太田・新見, 2018)をはじめとする様々な方法やアプローチによる調査・分析がなされるようになった。また、日本もほとんどの大学が海外へ学生を送り出して様々な体験をさせるプログラムを運用しており、プログラム評価もされている。しかしながら、評価のための実証的・理論的基盤が確立されているとは言い難い。とりわけ、ギャップイヤーのように、大学入学前や入学後の早い時期に留学やインターンシップを体験することが、その後の学修活動や就職にどのようなインパクトを与えるかについて、理論構築を目指した本格的な

研究は管見した限り日本ではまだなされていない。

「神戸グローバルチャレンジプログラム」(以下、「神戸GCP」と表記する。)は、神戸大学の1・2年次学生を対象に、海外で主体的な活動を行うことを重点に置いている。2016年度よりフィールドワーク、インターンシップ、ボランティア活動といった学外学修を展開しており、2019年度末までの4年間に、のべ約470名の学生が参加した。筆者ら¹が所属する大学教育研究推進室は神戸GCPの中心部局として全学部対象コースを提供し、これまでのべ127名の学生を海外での学修活動に送り出している。

本プログラムが開始された2016年に参加した学生が2018年度に卒業年次となり、学士課程全体と卒業後社会に出てからのキャリアについてある程度把握できるようになった。そこで筆者らは2018年度より、プログラム全体を評価する作業の一環として、当該年度末に卒業を控えた学生の面接調査を行っている。そこから、学外学修で得た気づきがそれまでとらわれていた感覚や思考から脱却させ、さらにその気づきが上位学年になっても持続してより深い知識や経験へと彼らを導き、その後の学修、就職、大学院進学といったキャリア形成にインパクトを与えていることが示唆された。²

こうした神戸GCPの学修成果(アウトカム)をさらに検討するため、2019年度も神戸GCPに参加歴があり年度末に卒業を控える学生を対象に面接調査を行った。本稿ではその面接調査の中から典型的と考えられる3つの事例を取り上げ、神戸GCPの参加者が1・2年次において主体性を重視した海外学修活動を経験することにより、4年間の学士課程期間にどのような成長を遂げるか、神戸GCPが大学生のキャリア形成にどのようなインパクトを与えるかについて考察し、海外での学修活動の学修効果、とくにキャリア形成に及ぼす影響に関するモデルを構築するための足場作りとする。

表1 調査対象学生一覧

No	所属学部・学科	インタビュー時の学年	神戸GCP参加年次	神戸GCP参加年度	参加コース	学外学修国	学外学修期間
A	法学部	4	2	2017	フィールドワークチャレンジコース	マレーシア	25日間
B	医学部保健学科	4	1	2016	ボランティアチャレンジコース	ラオス	2週間
C	経営学部	4	1	2016	ボランティアチャレンジコース	ネパール	2週間
			2	2017	インターンシップチャレンジコース	モンゴル	4週間

¹ 友松の同室所属は2020年9月末までとなる。

² 前報(友松・米谷, 2019)参照

2. 調査方法

2.1 調査対象

対象は2019年度末卒業予定の学生3名である。表1に3名の所属学部と参加した学外学修コースを示す。この3名が神戸GCPへ参加したのは2016年度から2017年度にかけてであった。なお、学生Cは本プログラムに2回参加している。

2.2 手続き

面接は昨年度同様、著者の1人が聞き手となり、2020年1月27日と28日にかけて非構造化面接法により行った。1人当たりの面接時間は大体30～60分であった。

3. 3名の事例

神戸GCPの経験がその後の学修やキャリア形成にどのように繋がったかを示す典型例として3名の学生の事例を取り上げる。以下に学生自身の面接での語りをまとめる。

3.1 学生Aの事例

<学生の背景と神戸GCPへの参加動機>

法学部に進んだ理由は法曹界というよりも法律そのものに関心があったから。地方出身のため、大都市圏の大学に行きたいと思っていた。関西の大学を選んだのは、東京は家賃などが高く、生活費が不安だったためだ。

高校では英語教育に重点を置いている学科に在籍し、修学旅行ではアメリカ・カリフォルニアに行った。これが初めての海外体験だった。修学旅行では現地の高校で1日体験プログラムとして英語による授業を受けたり、州立大学を訪問したり、ホームステイしたりした。コミュニケーションはホームステイ先ではジェスチャーを交えてなんとかあったものの、高校の授業は全然理解できず、英語力がないことに気付いた。

そのような経験から大学入学当初は留学を考えていた。そのため、入学してすぐ、所属学部の教務係や国際部が実施する留学フェアで留学に関する情報収集を始めた。神戸GCPを知ったのもそんなときで、国際部の留学フェアの会場でプログラムのパンフレットを見かけ、その後HPに目を通した。当時は短期で海外に行けるプログラムがあるという程度の認識で、神戸GCPへの参加を検討することはなかった。

2年次になって神戸GCPの募集を見ていたところ、マレーシアでの学外学修コースを見つけた。活動内容が自分の関心に合っていたこと、また、英語研修がついているうえ、英語研修の後、英語を使って活動に取り組むという内容もよいと思い応募した。

<学外学修での実践内容>

マレーシアのコース参加者は13名、活動期間は1ヶ月ほどだった。渡航後最初の2週

間は、クアラルンプール中心部にある英語学校に通った。そこには様々な国から来た学生が学んでおり、日本人以外の学生のほうが多かった。

プレイスメントテストにより振り分けられたクラスでの授業は、教員が学生とやり取りしながら進められており自分の意見を述べる機会が多くあった。初めのうちは英語を話すことに慣れていなかったため、このような授業スタイルに緊張したが、次第に授業内で発言できるようになっていった。また、授業の雰囲気慣れてくると、日本以外の国の学生はためらいなく話すものの、文法となると日本人学生のほうができるといったことに気づくようになった。

英語学校での研修期間を終えた後、クアラルンプール近郊のスバンジャヤで 2 週間弱、現地コーディネーターの指導のもとでフィールドワークに取り組んだ。ここでのフィールドワークは、参加メンバーが 2 人または 3 人のチームに分かれ、チームごとにテーマを設定し、そのテーマに沿って街頭で聞き取り調査や関係者へインタビューを行い、その結果を発表するというものだった。

自分のチームは、マレーシアに進出している日系小売企業の現地での知名度と現地の人とその企業の商品をどれくらい活用しているかというテーマを選んだ。街頭インタビューの実施場所を選ぶにあたっては、モールなどの商業施設の場合、許可を取るのが大変との現地コーディネーターの助言もあり、屋台が立ち並ぶ屋外のフードコートを中心にインタビューを行った。ほとんどの人がインタビューをお願いすると応じてくれ、初めこそ緊張したが、2 日間で 50 人ほどから回答を得ることができた。日本でこのような街頭での聞き取り調査をしたことはなかったが、日本でないからできたのかもしれないと思う。

インタビューを一通り終えた後、回答を分析し、最後の発表会に向け発表資料の作成と発表の練習を行った。その間、現地コーディネーターには 3 回ほど個別指導をしてもらいながら発表内容や資料をブラッシュアップした。最後の発表会では現地の人や現地で会社を営む日本人も参観する中、各チームが発表を行った。

<神戸 GCP の学外学修を経て気づいた変化>

当初、フィールドワークについて自分にできるのか不安を感じていたが、マレーシアでの学外学修を経て大きく 3 つの点で気持ちの変化があったと感じている。1 つ目はフィールドワークで行った街頭でのインタビューを通じ、現地の人にたくさん話しかけたことで英語を話すのが怖くなくなったこと。2 つ目は、新しいことにためらいなく挑んでいけるようになったこと。そして 3 つ目は、海外のいろいろなところに行きたいと思うようになり、一人で海外旅行に行くようになったことだ。

<神戸 GCP 参加後の海外活動について>

2 年生から 3 年生になる春休みに、個人的にカンボジアへ行きボランティア活動と観光

をした。ボランティア活動では、首都プノンペンから2時間ほどの農村にある、現地 NGO が運営する村の子どもたちに無料で英語などを教えるラーニングセンターで、日本やヨーロッパから来たボランティアと共に子どもたちに英語を教えた。活動自体は面白かったが、開発途上国の農村部は日本やこれまで行ったことのある国々とも何もかも勝手が違い、滞在環境や設備のレベルに最初は驚いた。しかし、来たからには慣れるしかないという気持ちで過ごしていたら滞在3日目あたりから慣れた。

3年生から、英語を使って法律の問題について議論する国際司法ゼミに入った。そのゼミは海外で開催される大会にも参加するゼミだった。そのため、ゼミ活動の一環で香港やイギリスで開催された世界各国の学生が会するディベート大会に参加したり、シンガポールで英語での調停に関するレクチャーを受けたりした。

<神戸 GCP への参加を振り返って>

マレーシアでの活動は、おそらく英語研修をしてフィールドワークに取り組むという流れがよかったのかもしれない。英語研修がなく現地に到着したその日からフィールドワークのために現地の人と話すのは難しかったと思う。マレーシア滞在中に一度、体調を崩し終日寝込んだが、その後の海外渡航ではカンボジアでも元気に過ごせたので、異なる環境への耐性も付いたと思う。神戸 GCP に参加したことが礎になり、どんなところでもやっていける自信が付き、新しいことにためらいなくチャレンジできるようになった。それが就職活動時のアピールポイントとなり第一志望の企業へ就職できたと思う。

3.2 学生 B の事例

<学生の背景と神戸 GCP への参加動機>

高校生のころから国際協力に携わるのが夢だった。国際協力分野で働くとなると専門的な知識やスキルが必要になる。それを身に付けるため看護師を志した。神戸大学を志望したきっかけは、高校生の時、進学先をいろいろと調べていたとき、受験雑誌に神戸大学は国際的で留学生も多いと書いてあった。また、自分自身も、神戸大学は国際文化学部(2015年度当時)や国際協力研究科があり、国際色豊かで留学生も多いというイメージをもっていった。神戸大学であれば国際的な様々なことができ、国際協力への道にも近くなるだろうと思った。これが神戸大学を選んだ主な理由である。その他、保健学科のパンフレットで最終学年での実習に海外協定校に行くプログラムがあることを知り、それにも参加したいと思った。

神戸 GCP は入学当初から知っており、どこかに行きたい気持ちはあったものの1年生の前期は機会を逸した。1年後期に、海外に行くことに興味があった友だちから春休みの学外学修コースのことを聞いた。参加についてしばらく考えた後、渡航先での活動内容が自身の関心に合ったこと、また実際に観光で行くことはない国と思われたことから、ラオ

スでのボランティアコースに参加することを決めた。これが初めての海外経験となった。

＜学外学修での実践内容＞

ラオスへの渡航期間は2週間で、ルアンパバン県の山間部の村にある公立小学校の子どもたちを対象とした青少年活動のボランティアをすることがメインだった。ラオスではすぐにこの活動に入るのではなく、まずはラオスのことを学ぶため、しばらく首都ビエンチャンに滞在し、JICA ラオスやラオス教育・スポーツ省、国立教育科学研究所 (RIES) で現地の教育事情に関するブリーフィングを受けた。また、ラオス国立大学で現地学生と交流し、そこで仲良くなった学生たちと一緒にビエンチャン市内の観光に行ったりもした。その後、小学校での活動のためルアンパバン郡に移動した。

小学校はルアンパバン郡から車で1時間くらいの山奥にあり、毎日町から通った。小学校では全学年(1~5年生)を対象に工作(糸電話やバルーンアート)や運動(大縄、バレーボール、ドッジビー)の指導をしたほか、けん玉や折り紙をして日本の遊びも紹介した。最後に「ミニ運動会」を企画・開催した。日中、校庭で子どもたちと遊ぶのはとても暑かったが、とても楽しかった。村から戻ると、毎晩参加メンバーと宿泊先のゲストハウスの部屋で翌日の活動のために工作の準備や実演の練習をした。最後に実施した「ミニ運動会」は、毎日子どもたちと遊んだり活動準備をしたりする中で生まれたアイデアだった。

＜神戸 GCP の学外学修を経て気づいた変化＞

神戸 GCP での経験を通じて気づいた変化はいくつかある。まず、何よりも海外に行くことに対してハードルが下がったこと。次に、自分の考え方が広がったことである。そのことはいろんなことを変えた。ラオスコースの後、さらなる海外経験に関心が向くようになったのは、初めての海外であったラオスでの滞在や、そこでの活動が素晴らしい経験であったから。それがなければさらなる海外経験につながらなかったと思う。渡航先の土地勘を掴むにはその土地のことについて理解を深めるのに加え、現地の人と話すことも大切なので、様々な土地で地元の人ともっと話すことができたと思うようになった。

＜神戸 GCP 参加後の海外活動について＞

神戸 GCP に参加した後、大学の長期休暇毎に何らかの海外活動に参加した。その内容はボランティア活動や現地 NGO の活動現場視察、大学主催の海外プログラムなど多岐に渡る。観光旅行を含めると学部4年間で渡航した国は10ヶ国近くにのぼる。その主な活動内容は次のようなものになる。

ラオスから帰国後、2年生の夏休みに、カンボジアで現地 NGO が主催するボランティア活動に参加し、首都プノンペンから2,3時間離れた農村で子どもたちに英語を教えた。英語指導ではドイツ人のボランティアとペアを組み初級レベルのクラスを担当し、絵や音楽

を使ってアルファベットや英単語を教えた。宿泊先は高床式の小屋に布団を敷き、蚊帳を吊って寝る生活で、トイレもシャワーも同じ場所にあり生活するには過酷な環境だった。しかし、子どもたちに懐かれ、活動が楽しかったことと仲間がいたことで、そのような環境での滞在も乗り越えられた。

その後、フィリピンへ行った。当初はセブ島だけを旅行するつもりだったが、折しも、大学の先輩がマニラのスモークマウンテンのそばにある現地 NGO でインターンをしていて、国際協力に関心があったこともあり、将来何かつながるかもしれないと思い、予定を急遽変更して2日ほどマニラへ行き、現地 NGO が貧困層の母親の就労支援プロジェクトで米の袋を活用してバッグやポーチといった商品を作っている現場を見学した。

3・4年生では学部が実施する海外プログラムに2度参加した。1つ目は3年生の春休みに行われた台北医科大学主催の看護学生を対象としたプログラム。2つ目は、4年生のとき看護実習の一環で参加した、保健学科の協定校であるタイのチェンマイ大学でのプログラムだ。このプログラムでは現地の学生と病院を視察したり、地域の患者を巡回する実習に同行したりし、タイの医療事情の現在を学んだ。台湾とタイのプログラムは大学の単位にもなり、特に後者は必修単位が取得できたことに加え奨学金の支給もあった。自分自身の関心を追求する中で神戸 GCP や自学部の海外プログラムに参加する機会を得ることができ、大学の資源をフル活用できたと思う。

<神戸 GCP やその後の海外体験を振り返って>

4年間を通じて様々な背景を持つ人とかかわることが多かった。そのため、相手の背景を考えて接することが大事だと学んだ。看護学を専攻しているので、国内での実習ではお年寄りの人とかかわることが多いが、国籍が同じであっても育ってきた背景が異なるとどこに話を合わせるかななどを素早く判断できるようなコミュニケーション能力が求められる。また、同じ国の人同士でも、海外の人と話すときと同じように、その人の背景などを考えてコミュニケーションをとらないと信頼関係は生まれてこない。日本で実習に行って患者さんを受け持つことで学んだことも多々あるが、それ以上に、海外へ行って人とかかわって知ったことの方が自分に残るものがあった。

将来的には開発途上国での医療活動に参加したい気持ちもあったので、ラオスやカンボジアでの活動はその布石になったと思う。もともと子どもが好きだったが、これまで様々な活動に取り組み、子どもに一層関心を持つようになった。卒業後は看護師として東京の病院に就職が決まっているが、ゆくゆくは周産期や未熟児の医療にもかかわりたいと思っている。

就職先を東京にした理由は、海外に行くようになりマイノリティを意識するようになり、マイノリティにも分け隔てなくかかわることができる看護師になりたいと思い、この母数が多く、多様性にあふれる環境でもっと自分を成長させたいと思ったからだ。

しばらくは国内で看護師としてキャリアを積むことになるが、看護師として海外で活動することは今も興味がある。また、ワーキングホリデーなど別の目的で海外に渡航することにも興味がある。視野を狭めず海外で活動する選択肢を作りたい。

3.3 学生 C の事例

<学生の背景と神戸 GCP への参加動機>

本格的な海外経験は中学 2 年生と 3 年生の間の春休みに行ったイギリスでの 2 週間の英語研修である。奈良県内の中学校各校から選抜された生徒と一緒に、20 名くらいのグループで渡航した。現地ではホームステイをしながら平日は英語学校で授業を受け、週末は観光をした。

神戸大学に進学したのには母親が神戸大学出身であることが大きかった。経営学部を志望したのは学部のイメージがよいことと卒業後の就職先の選択肢の幅が広く、そのほうが自分にはよいと思ったから。高校の頃から報道の仕事に就くことを希望しており、中でも報道関係のアナウンサーになりたいと思っていた。アナウンサーを目指すか、もしそれを諦めたとしても一般企業への就職に転換することもできるので、経営学部を選んだ。

神戸 GCP は 1 年生の第 2 クォーターの初め、英語の授業で配布されたコース募集案内で知った。案内には何ヶ国かのコースが書かれていたが、ネパールでのボランティアコースに目が留まった。イギリスに行ったことがあったので、大学に入学したら開発途上国に行ってみたいと思っていた。費用もそれほど高くなく、大学から助成金が支給されること、また同窓会からも助成があると知り、参加費用は自分のバイト代で賄えると思った。

続いて 2 年生でも神戸 GCP に参加し、モンゴルの高専で日本語・日本事情教育指導補助のインターンシップをした。参加動機は、前年、ネパールに渡航する際、途中の経由地タイ・バンコクまで日本語・日本事情教育指導補助のインターンシップでミャンマーへ行く学生と一緒にいた。道中、彼らから話を聞き日本語教育が面白そうだったからだ。

<学外学修での実践内容>

ネパールでの主な活動はカトマンドゥから車で西に 4 時間ほど行った山間部の村の公立小学校でボランティア活動だった。ネパールの教育課程には図工、音楽、体育といった情操教育科目がない。学校では日本の伝統的な遊びを交えながら自分たちで考えた情操教育に関する授業を行った。その他、カトマンドゥで日本大使館や JICA ネパールを訪問し、ネパールの教育事情や大地震後の状況について話を聞いたり、ポカラで小学校の先生になるために遠隔地からポカラに来て教育を勉強している女学生と交流をしたりした。

一連のネパールでの経験の中で最も印象に残っていることが 2 つある。1 つは、カトマンドゥのスワヤンブナートというネパール最古の仏教寺院を訪れたとき、乞食や手足のない人がお寺の前で物乞いをしているのを見た。絵に描いたような物乞いの姿にこれが現実

なのかとすごく衝撃を受けたのを今でも鮮明に覚えている。おそらく、このことが報道の仕事に就こうと心に決めた一因になっていると思う。

もう1つは、ポカラで小学校の先生を目指す女学生との交流だ。彼女たちは自分たちと年齢的にほぼ同級生だったが、生まれ育った国が違ふと考え方や感じ方が天と地ほどの隔りがあるのかと思っていた。実際に様々なトピックで話をしていると、民族的な背景や伝統や宗教的な価値観で考え方が日本人と異なる点もあったが、恋愛の悩みや好きなことや嫌いなことといった事柄は、自分たちが普段悩んでいることや感じていることと似ているところが多く、やはり同世代の若者だと感じた。

翌年、インターンシップをしたモンゴルへは学生3人だけで渡航した。インターン先の高専は3校あり、3人それぞれ別々の学校に派遣された。現地滞在中は高専での仕事も日常生活もほとんど1人で過ごした。日本語授業ではモンゴル人の日本語の先生のアシスタントとして発音の見本や会話や平仮名の練習を担当したり、日本語の様々な事柄について教えたり、パワーポイントで日本事情に関する資料を作成し紹介したりした。高専での授業のほかウランバートル滞在中はモンゴル人の神戸大学卒業生との交流をし、多くの貴重な出会いもあった。彼らを通じ、政治家、起業家、研究者など普段日本では会う機会のない人たちとも交流したことは貴重な経験だった。

<神戸 GCP の学外学修を経て気づいた変化>

海外は国内では考えられないほどの多様な価値観に溢れており、それらに触れたことにより、自分の視野を広げ、考察力を深めたと思う。また、ネパールへの渡航で海外へ行くことに対するハードルが下がり、どんな環境でもやっていく自信がついた。

一方、ネパールでの活動は、積極性や自信がなかったため、自分が言いたいことが伝えられず、一緒に行ったメンバーに頼らないとコミュニケーションが取れないことも多かった。そこでの悔しい思いから何事にも積極的に挑戦する気持ちが芽生えたと思う。

モンゴルでは言葉の壁もあったが、職場におけるコミュニケーションの取り方が分からず、職員室に溶け込むことができず、フラストレーションを溜めてしまった。このことはのちにアルメニアで日本語教育のインターンシップに再度挑戦する動機の一つにもなった。

<神戸 GCP 参加後の海外活動について>

ゼミ、部活、就職活動で手一杯だった3年生を除き、その後2回、海外で活動に取り組んだ。1つ目は、2年生の春休みに参加した、東南アジアの子どもたちに生のオーケストラ演奏を届ける活動を行う NPO 法人が実施するカンボジアへの演奏旅行だ。所属するオーケストラ部の先輩からこの演奏旅行への参加を勧められたとき、現地に行けば何とかなるだろうと思い、同じオーケストラ部のメンバー2人と参加した。

2つ目は、4年生の夏休み、高度教養科目「海外インターンシップ実習」の学生企画型コ

ースに参加し、アルメニアの日本語学校で再び日本語教育のインターンシップをした。卒業前に海外で活動をしたいと神戸 GCP のコーディネーター（友松）に相談したところ、アルメニアの学校から日本語教育のインターンのリクエストが来ていることを知った。これまで神戸大学から派遣歴のないアルメニアの日本語学校のインターンシップに行こうと思ったのは、モンゴルの高専で日本語授業のアシスタントをした経験が大きかった。またあの時、職場に溶け込めなかった悔しさもあり、今回は職場に溶け込み、現地の人に同じ職場の同僚として信用してもらいたいという気持ちもあった。

日本語学校には学生から社会人まで様々な人が通っていた。日本語指導にあたっては、モンゴル帰国後に通っていたアナウンサー学校で学んだことが役に立った。中でもスピーチコンテストの指導でその経験が活かされた。アナウンサーの学校に通っていたことで、状況を分かりやすい文章で伝える原稿を作成すること、その原稿を声に出して読むことには自信があった。そのため、原稿を書くところからスピーチの指導までそれなりの結果を出すことができた。インターンシップ最終日を迎えたとき、翌週から来ないのは考えられないと言われたのを始め、様々な人から感謝されたことはうれしかった。1ヶ月間、自分はしっかり貢献できたのだ、自分が必要とされていたのだと実感した。また、アルメニアでは日本語学校のインターンをする傍ら、同じ時期に神戸 GCP でアルメニアへフィールドワークに来た1・2年生の学修サポートにも携わった。

<神戸 GCP やその後の海外体験を振り返って>

ネパールに渡航する前の事前学修での心の動きが今でも印象に残っている。コースへの申込みは自分の好奇心が勝っており勢いでしたところが大きかった。そのため申込み時は渡航する実感がなかったが、事前学修で危機管理学修を受け、実際に行くのだという実感が湧いてきた。そして、危機管理学修で学んだ「自分の身は自分で守る」はその後の海外での活動に役に立っている。

何事にも積極的に挑戦するということについては、この意識はより大きな経験へと導き、その自信やチームをまとめる力を養うことにつながったと思う。一例としては、3・4年生にかけ所属する部活動で責任ある役職を務め、部員150名を統率してきた。リーダーにとって様々な意見に耳を傾け、まとめていくのは容易ではなかったが、海外経験で養われた考察力や自信があるからこそ大きなトラブルへの対処や新しい取組みにも挑むことができたと思う。

その他、渡航先で現地の人と触れ合いながら活動をする経験を通じ、現地の課題や魅力を見聞きしたりする機会も多々あったせいか、次第に日本国内の課題や魅力についても関心が向くようになった。もともとアナウンサーを志望していたが、最終的に職種を選ぶ際に重視したことは多様性を理解し、感じたことを発信することと日本と世界をつなぐ仕事という点だった。その結果、記者の道を選んだ。この点は海外での経験なくしては持ちえ

なかったものだと思う。

4. 考察

1・2年次に海外での学修活動に参加したことが、その後どのようなプロセスをたどってキャリアに結びついていくのかについて、上述した3人のインタビューに加え、他の資料も交えながら考察する。ここでは自己効力感の発達、海外経験の連鎖と相乗効果、進路選択への影響、コンピテンシーからみた海外経験の意義という4つの観点からみていく。

4.1 自己効力感の発達

先にあげた3名の学生に共通することは、1・2年次で神戸GCPで海外での学修活動を経験後、神戸GCPに再参加もしくは学内外の別の海外プログラムに参加していることだ。学生A・Bは、神戸GCPに参加後、外部団体が実施する海外ボランティア活動に取り組み、上位学年では専門分野の活動で海外のディベート大会や学科主催の海外プログラムに参加している。また、学生Cは、神戸GCP参加後、再度神戸GCPに参加しているが、上位学年では国こそ違え、2年次に参加した2度目の神戸GCPと同じ日本語教育のインターンシップに改めて取り組んでいる。

このように3名とも、キャリアを自分の手で積み上げるにあたり、初めての神戸GCPでの経験をもとに一つのベクトルを見出していると考えられる。神戸GCPでは事後学修の一環として海外での学修活動から帰国して1ヶ月以内にフィードバックシートを作成・提出させている。それには学生Aは次のように書いている。

語学学校でいろいろな人に話しかけて仲良くなったり、自分で行き方を調べて観光地に行くことで、ためらいなく色々なことができるようになったと思う。ツインタワーに忘れ物を取りに行ったり、買ったリングが大きすぎて交換してもらいに行ったり、電話でタクシーの運転手に自分がいる場所を伝えたり、マレーシアに来る前だったら語学力を気にして諦めていたであろうことも、とりあえずやってみようと思えるようになった。

(学生Aの「2017年度グローバルチャレンジプログラム大学教育研究推進室フィードバックシート」より原文ママ。下線は筆者による)

下線部と同じことが、前述した事例からも確認できる。3名が参加したコースは、どれも、現地社会にどっぷり浸かった生活をしながら海外学修活動に取り組むものであり、ときには現地事情や文化・宗教的背景、現地人の気質や考え方の違いなどに戸惑い、翻弄されながらも、なんとか臨機応変に対応して予め計画したフィールドワークやボランティア活動をやり遂げることが要求される。そして、活動終了時には現地の人々から感謝されたり、

フィードバックコメントをもらったりし、活動の手ごたえも感じることができる。

学生Aは「自分にできるか不安を感じていた」フィールドワークのほか、英語でのコミュニケーションや行動を起こす力などが課題として立ちはだかっていたが、現地で自ら動くことでその一つ一つを乗り越えることができた。こうした経験により学生Aは自信が生まれていることに気づく。その自信は、「次への行動に自信を持って踏み出す強烈な動機付け」(奥山, 2017:96) となり、Aが次段階の海外学修活動に挑戦することを後押しする原動力の一つになったと考えられる。

奥山(2017)は、前に踏み出す自信は強烈な自己暗示に他ならないが、それは「バンデュラ(Bandura, A)が提唱した自己効力感(self-efficacy)という概念に当てはまる」(奥山)と述べている。学生Aもこうした自己効力感を得たのではなかろうか。また、「海外へのハードルが低くなった」という学生B・Cらが、その後さらなる海外での活動へ向かっていることから、神戸GCPを通じて生じた自己効力感、すなわち新たな自己発見(自己の再定義とでも言えるようなもの)がその後の海外学修の大きな動機づけとなっていると考える。

それに加え、神戸GCP参加後に学生Aが学生だけの渡航を企画・実施したり専門分野での海外活動へ参加したりするなど、ハードルを上げてチャレンジし、それによってさらに成長しているように、1つの海外経験での自己発見がきっかけとなって更なる海外経験を生み、その成功がさらにより高度な海外経験へと向かわせるといった「自己効力感の正のスパイラル」(奥山)がみてとれる。3つの事例のどれからでも、そうした「自己効力感の正のスパイラル」にうまく自分を乗せてキャリアを切り拓いていくという、キャリア形成の一つの望ましい道筋が見えてくる。

4.2 海外経験の連鎖と相乗効果

次に、海外での学修活動を学士課程期間に複数回経験することについて学生B・Cの事例を中心に考えることにしよう。

学生Bは神戸GCPの活動から帰国後のフィードバックシートに、日本の子どもたちとは全く異なる反応や動きをする現地の子どもに戸惑いを感じたことや子どもたちとの間に言葉の壁があったものの、それを表情や身振りなどでコミュニケーションを取りながら活動を進めた経験について次のように述べている。

私たちは日本で生活しているから、日本の環境や考え方に慣れてしまっているけれど、海外に行くと、このような考え方は常に通用するわけではないということを学びました。そこで、少しでも現地の方々の考え方や異なる文化を理解する力はないかと思います。また、私たちはラオ語がわからないし、子どもたちも日本語がわからないうえ、通訳さんにも必ずしも私たちの言いたいことが常に伝わ

るというわけではありませんでした。しかし、それでも、ハイタッチや表情などの、言葉ではない部分でコミュニケーションをとれました。これは、非言語的コミュニケーション能力を少し身につけることに繋がったと思います。帰国してから、振り返っていると、この能力は、海外ではとても重要なことだということだったので、今後も非言語的コミュニケーション能力を伸ばしていきたい。

(学生Bの「2016年度グローバルチャレンジプログラム大学教育研究推進室フィードバックシート」より原文ママ。下線は筆者による)

学生Bは、海外経験から学んだこととして非言語コミュニケーションツールのメッセージを伝える影響力の大きさをあげている。そして海外での活動で多様な人とのかかわる経験を繰り返す中、相手の気持ちや状況を推し量ることの重要性に気づく。やがてBはその学びが専門分野である看護学の実習現場にも適用できることを見出す。つまり、自らの専門分野における本質的な要素を、海外での活動経験を通して気づき、確かめ、自分の力にしていこうとしている。

学生Cは、これとは異なる形で経験の繰り返しがもたらす意義を示している。同じ経験を重ねるものの、意気込みや動機が変化し、それにより経験の質や内容が別なもの、別次元のものになっている。

Cは2年次にモンゴルで初めて日本語指導補助に取り組んだ。Cは授業自体、また授業に関わる業務、現地での生活や様々な交流も楽しんだようだが、1つ苦い思いをしている。それは職員室での経験だ。社会人としてのコミュニケーションの取り方が分からず、職員室に溶け込むことも職場での信頼関係を築くこともできずCはフラストレーションを抱える。その後、4年次でアルメニアの日本語学校でのインターンシップに行く機会を得たとき、職場に溶け込み、同僚として信用してもらうことも活動の目標の1つにした。最終的に本人の奮闘もあり、インターンシップの最後には日本語学校の誰もがCが去るのを惜しみ、Cは自分が仲間扱いされ、職場に必要とされていたことを実感する。

このような成果が得られた背景には、Cが部活動で責任的な役割を果たして成長したこと、また、就職活動を経て分別がついたということも多かれ少なかれあるかもしれない。しかしながら、モンゴルから帰国後アナウンサーを目指すために通った専門学校で身につけた日本語を話す技術や短く効果的にまとめて伝えるといったスキルがアルメニアでの日本語指導に大いに活かされ、学校に貢献したことも大いに役立ったと考える。似たような海外経験を繰り返す場合、前の経験で得た学びや気づき、特に教訓と言えるようなものを次の経験に生かすべく、インターバルにどのようなことをするか深く考えて実行することこそが経験の連鎖が相乗効果となって当人を大きく成長させるのではなかろうか。

4.3 キャリア選択へのインパクト

海外での学修活動経験は、学生B・Cがキャリアの方向性を絞っていく過程にも影響していると考えられる。

学生Bが看護の道を選んだ動機は、高校生のときから国際協力に関心があり、専門的な知識やスキルを身に付けたいと思ったからである。大学卒業後、看護師としてキャリアをスタートさせる場所として東京を選んだ。マイノリティにもかかわる機会が多くなると思われる、多様性に溢れる東京で看護師経験を積みたいというのがその理由である。

また、元来子どもが好きだったというBは海外での活動経験を通じて子どもを看ることに関心を持ち、ゆくゆくは周産期や未熟児の医療にもかかわりたいと述べている。就職する地域の選択、将来的にかかわりたい分野についての選定は、学生Bの海外での学修活動経験なくしては至らない選択・選定であろう。

学生Cの場合、かなり早い時期からアナウンサーを目指し、専門学校にも通ったほどであった。しかし、海外での学修活動で得た様々な外国の知識・経験は国内の社会問題への関心を喚起し、最終的なキャリア選択ではアナウンサーではない職種（記者）を選んでいく。

彼らの最終的なキャリア選択に神戸GCPは直接は結びついてはいないものの、それがきっかけとなっていることは確かであり、その後の海外活動を含む様々な経験が組み合わせられ、相乗効果となってキャリアという道筋をつけていく力となっていったと考える。

4.4 海外での活動経験を繰り返すことで培われたコンピテンシーについて

この道筋をつけていく力はどこから来たのか。3名の学生が海外での活動経験を繰り返すことで培ったものは社会に出て役立つ真のコンピテンシーであると考えられる。

学生Bが海外経験から獲得しているものを、OECDのDeSeCoで提唱された能力概念”キー・コンピテンシー”に沿って考察してみる。キー・コンピテンシーの概念は図1のように「相互作用的に道具を用いる」「異質な集団で相互にかかわりあう」「自律的に行動する」の3つの力からなる。そして、それぞれのカテゴリーの力は相互に作用しながら機能し、「文脈や状況によって、それぞれ力の重要度は変化するかもしれないが、コンピテンシーは相互に関係し、文脈に依存しながら働く力と考えられている」（松尾，2017:13）。

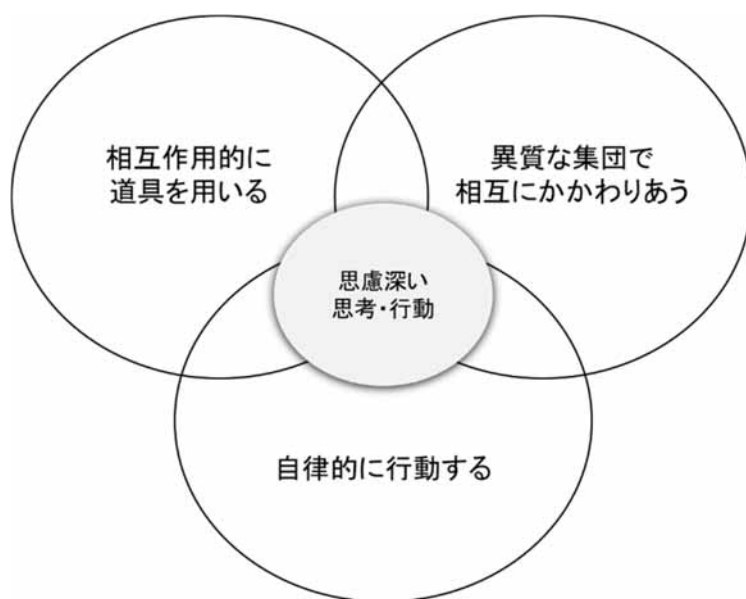


図1 DeSeCo キー・コンピテンシー 3つのカテゴリ³

このように状況に応じて作用の強度を変えるコンピテンシーの中心に「思慮深い思考と行為」(think and act reflectively) (OECD, 2005:5) がある。これは変化に対応することや、経験から学ぶこと、批判的な視点で思考することなども含まれる。松尾はキー・コンピテンシーを「具体的な状況の下で、文脈に応じて活用するもので、思慮深く思考しながら行為し、複雑

なニーズや課題に応える能力」と定義する(松尾, 2017: 13)。

学生Bにこれをあてはめると、Bは自分の関心を追求するため海外での活動に数多く関わってきた(=自律的に行動する)。英語や片言の現地語、身振りや表情といった伝達手段を使い(=相互作用的に道具を用いる)、現地で出会った人たちと良い関係を築くのがうまくなるにつれ(=異質な集団で相互にかかわりあう)、海外の人と話すとき相手の背景を考えてコミュニケーションを取ることが重要であるということ学んだ(=キー・コンピテンシーが相互に作用し、文脈に依存しながら“思慮深い思考”がもたらしたもの)。

次に、こうして培われたコンピテンシーを内包する“思慮深い思考”は、専門分野である看護の実習現場という別の文脈で、再び、「相手の背景を考えた上でコミュニケーションを取ることが重要である」ことを見出し、看護される側と接するときに援用する。これを発見した力もまた、キー・コンピテンシーが相互に作用し、文脈に依存しながら“思慮深い思考”がもたらしたものだと考えられるが、一見関連性がないように見える海外での学びを看護実習の現場でも援用できることを見出した力は非常にユニークであり、学生Bに固有のものと言えるかもしれない。

「キー・コンピテンシーとは、つまり、道具を介して対象世界と対話し、異質な他者とかわりあい、自分をより大きな時空間の中に定位しながら人生の物語を編む能力だといえる。それは、能力概念を個人の内部から、個人が対象世界や道具、他者と出会う平面へと引き出す。そこでの能力は、関係の中で現出するものでありつつ、個人に所有されるも

³ 出所：OECD(2005),”The Definition and Selection of Key Competencies: Executive Summary”, p.5 を参考に筆者作成。

のもである。」(松下, 2010:22)。Bが就職する地域に東京を選んだ理由に見られるように、経験により各コンピテンシーが豊かになればなるほど、そこに見出されたもの、思考されたことの固有性は強くなると考えられる。経験によるキー・コンピテンシーの涵養、これこそが学生がキャリアを形成していく上で道筋を付けていく力になったのではないかと考える。

参考文献

- OECD (2005) "The Definition and Selection of Key Competencies: Executive Summary"
<https://www.oecd.org/pisa/35070367.pdf> (最終アクセス: 2021年1月9日)
- 奥山和子 (2017) 「留学経験がもたらす効用としての自己効力感の形成プロセス—質的研究手法を使って—」『大学教育研究』第25号、pp.83-101.
- 友松史子・米谷 淳 (2020) 「神戸 GCP の成果に関する一考察 —参加学生の面接調査をもとに—」『大学教育研究』第28号、pp.71-86.
- 松尾知明 (2017) 「21世紀に求められるコンピテンシーと国内外の教育課程改革」『国立教育政策研究所紀要 第146集、pp.9-22.
- 松下佳代 (2010) 「序章 <新しい能力>概念と教育 —その背景と系譜」松下佳代編著『<新しい能力>は教育を変えるか—学力・リテラシー・コンピテンシー』ミネルヴァ書房、pp.1-42.

分担

本論文の作成にあたっては、面接調査は友松がコーディネーター、米谷が聞き手となって実施し、録音した音声を手松が文字起こししたものを整理した。本文については友松が原案を作成し、米谷が監修した。